



## 林 芙美子

花のいのちばみじかくて 若しきことのみ多かりき

この短詩や小説「放浪記」などの作品で知られる作家 林芙美子は、明治三六（一九〇三）年、北九州市門司区小森江（現在名）に生まれました。

芙美子は、一一歳まで行商する両親に連れられたり、親戚にあずけられたりして、下関、長崎、佐世保、鹿児島などを転々と移り住みました。

大正五年（二三歳）のとき尾道市に落ち着き、翌年、市立尾道小学校を二年遅れで卒業しました。九年（一五歳）のとき、文才を認めた先生の勧めで尾道市立高等女学校へ進学しました。彼女はたいへんな読書家でした。家に帰っても両親がいないので、毎日、遅くまで図書室で本を読みふけりました。

女学校では、国語の森先生は彼女にハイネ<sup>※1</sup>、ホイットマン、アイヒェンドルフを教えました。また後任の今井先生は、芙美子を物心両面で支え文学に目を開かせ、彼女の才能に大きな影響を与えました。彼女は一八歳になってから地方新聞に投稿を始めました。詩や短歌が認められ、掲載されるまでになりました。芙美子はますます文学活動に熱を入れ、他校の文学仲間との交友を拡げました。尾道での女学校時代は親友たちに恵まれました。

大正一一年四月、一九歳で高等女学校を卒業したばかりの芙美子は、友達をたよって上京しました。東京に出てきてから、芙美子は、風呂屋の下足番、小学新報社で帯封書き、株屋の事務員、女工、女給などになり、貧しい生活を支えました。八月には両親も上京、神楽坂、道玄坂などで親とともに荷車を引いて夜店を手伝うこともありました。

九月一日、関東大震災が襲いましたが、芙美子は家族とともに、日比谷公園でおこやもちを売りました。彼女はそのときのことを、「（東京では）親類もなく、知人、友人もない田舎出のわたし達は、何もはづかしいものがありませんでした」と書いています。彼女はいったん尾道に帰り、旧友、恩師の家に泊まり、再び上京しました。そして、お手伝い、セルロイド工場の女工になって働きました。

その後、彼女は詩作に励み、多くの詩人と親交を深め詩誌を創刊しました。カフェの女給をしながら、詩や童話を書き続けました。彼女には文学を通じて、親しい人間関係が築かれていきました。彼女は平林たい子と詩や童話を売り込むために雑誌社や出版社を回りましたが、生活は楽ではありませんでした。

毎年毎日、芙美子にとっては苦しい生活が続いていましたが、昭和三（一九二八）年頃から少しずつ仕事が増えてきました。そしてついに昭和五年、一冊の本「放浪記」が公刊されると、たちまちベストセラーになり、芙美子は一躍有名になりました。読者を魅了しヒットしたのは、社会の底辺でたたかに生きる若い女性の屈託のない姿が共感をよんだからでしょう。

「私は野原へはふり出された赤いマリだ！ / 力強い風が吹けば / 大空高く / 鷲の如く飛び上がる。おゝ風よ叩け！ 燃えるやうな空気をはらんで / おゝ風よ早く / 赤いマリの私を叩いてくれ。」（「赤いマリ」）

彼女の生はこの詩の赤いマリに象徴されています。生活の苦しさの中に身を置きながらも、苦難に会えば会うほどそれをね返す精神の強さは幼少期の放浪生活によって鍛えられた精神のおかげでしょう。彼女には暗さがありませんでした。芙美子は、生まれつき明るく前向きで楽天的でした。彼女は女流作家として高い評価を受けましたが、それは彼女の努力によるものでした。

終戦（昭和二〇年）の暮れ、芙美子は空襲から免れて無事だった下落合の自宅に疎開先から戻りました。すぐ執筆活動を始め、二一年には「吹雪」「雨」を発表しました。彼女の心は、戦争犠牲者の不幸や悲しみに向けられ、一年間で一二本もの短篇を書き上げました。

芙美子は無名のとき、原稿の売り込みに苦労したので、人気作家になっても執筆依頼を断りませんでした。彼女は、原稿を書きに書きました。昭和二四（一九四九）年から二六年にかけて、九本の「中編・長編小説」を並行して執筆し、新聞・雑誌に連載しました。私用、取材、講演のための旅行も多くし、随筆、紀行文なども執筆しました。座談会などの活動もたくさんありました。

そのころ彼女は、極度の疲労を蓄積してしまい持病の心臓病が悪化していきました。しかし、体の無理を重ねながら、「浮雲」などの名作を生み出していきましたが、ついに、芙美子は力尽き病に倒れてしまいました。昭和二六（一九五二）年六月二六日、芙美子は、過労による心臓麻痺のために急死し、四七年の生涯を閉じました。

告別式は川端康成を葬儀委員長として自宅で執り行われました。文壇、ジャーナリズムの関係者が大勢参列し焼香しました。さらに、普段着姿の老若男女が一般焼香者としてひきもきらず、芙美子の冥福を祈りました。庶民への共感と応援をこめた作品を生み出してきた芙美子の死を惜しんだからでしょう。

（注）※1 ハイネ（ドイツの詩人・作家、ホイットマン（アメリカの詩人・随筆家、アイヒェンドルフ（ドイツの詩人・小説家）

※2 川端康成が芙美子に親しく接していたのは、「煩惱のままに生きる人間への興味」ではなかったかと言われています。

〈わたしたちは、林 芙美子から何を学ぶか？〉

- ◎ 一つ、不撓不屈（大きな困難に直面しても、希望と勇氣をもって困難に屈せず、粘り強く最後まで着実にやり抜く強い意志をもつ。）
- ◎ 二つ、明 朗（いつも明るい気持ちをもって生きようとする。）
- ◎ 三つ、勤勉努力（自分でやろうと決めたことは、最後までやり遂げようとする。）

## 《参考》

◇ 「放浪記」で得た印税をもとに、芙美子は一九三二（昭和六）年、下関から韓国の釜山ぶさんに渡り、朝鮮半島を縦断し、シベリヤ鉄道でモスクワへ、さらにベルリンを経てパリへと到着しました。

「昭和六年フランスへ旅立って行きました。この当時、私は行動主義でもあったわけです。・・・シベリヤのさまざまな雪景色を眺めて、外国でのたれ死にするかも知れないと、本気でそんなことを考えてみました。・・・着くと早々フランが高くなった為に、私は毎日々々アパルトマンの七階の部屋で雑文を書き、巴里へ送って来た金を逆に日本の両親のもとへ送らなければならなかったです」（『文学的自叙伝』）・・・世界恐慌で日本円が暴落、随筆・雑文を書いて日本へ送り、原稿料で日本の家族とパリにいる自分の生活を支えました。

◇ フランス滞在中に芙美子は「日本の言葉の美しいのに愕き、その言葉で歌った日本の詩に金鉱を掘りあてたようなほこりを持った」のでした。彼女は、もつとたくさんの詩を書きたいとのぞんでいました。しかし、帰国後の芙美子を待っていたのは、小説・随筆・紀行文の注文ばかりだったそうです。彼女はひたすら仕事をこなし、旅行中の借金返済、生活費の捻出に勤めました。

◇ 戦争のために一九三七（昭和一二）年以降、彼女は報道班員として動員され、中国、ベトナム、シンガポール、ジャワ、ボルネオなどに赴きました。執筆活動は戦争を反映した作品を書きました。作品は、「戦線」「北岸部隊」「十年間」「川歌」など。

◇ 一九四四（昭和一九）年、長野県に疎開しました。「私は長野県の山の中で二冬を疎開してすごしました。・・・山のなかの夏の暮しはあわたしく過ぎてゆくけれど、冬になると、やりきれないほど寒さが長くて、朝から晩まで炬燵にゐるか炉のそばにゐるかの所在のない月日を過ぎなければならぬ。」「（『童話の世界』）

（出典・参考文献）

国文学「解釈と鑑賞」特集 林芙美子の世界（一九九八年 至文堂）

生誕一〇〇年記念「林芙美子展」（新宿歴史博物館・財団法人新宿区生涯学習財団）他

◆林芙美子記念館・・・芙美子は新宿区中井が気に入ってずっと定住しました。新宿区立林芙

美子記念館は、芙美子が、昭和一六（一九四一）年八月から昭和二六年（一九五二）六月二八日にその生涯を閉じるまで住んでいた家です。いまは、彼女の著作や昭和二〇年代の新聞などがガラスケースに収められていて、ビデオで芙美子の記録を見ることができます。



記念館の南側。木立の右側奥に家がかいま見えます。西武新宿線中井駅より徒歩7分です。家屋の設計は山口文象。数寄屋造りのこまやかさと民家風のおおらかさが感じられます。



記念館の外を四の坂側から撮りました。右側の塀の途中に 玄関へ向かう入口があります。入場口は塀に沿ったまだ先にあります。



坂の中腹にある門。芙美子はこの門を大変気に入っていました。中の石畳を登ると玄関があります。



真中が玄関。玄関の右手に客間があります。玄関付近には芙美子の好きな孟宗竹がたくさん植えられていましたが、死後、少しずつ切られたために、現在は数少なくなりました。



客間。原稿を受け取りに来た人たち・執筆依頼客が何人も待たされました。朝10時から入れ替わり立ち替わり来客がありました。



書斎。半障子の向こう側、廊下越しに北の小庭が見えます。芙美子は熱中すると眼鏡をはずして顔を机につけるように執筆しました。文机が窓際へ窓際へと押し出されたそうです。



芙美子は、養子にむかえた泰が小学生のころ、ピアノを習わせました。そのために東京芸大の学生をやといましたが、泰はピアノの練習がいやで逃げまわったそうです。



茶の間。掘りごたつ・つり戸棚・二段押し入れなどを設け、芙美子は暮らしやすさを考えました。楽しい一家団欒の場所でした。



庭。もみじ・ざくろ・寒椿・カルミア、カタクリ・サフランなど、芙美子の愛した四季折々の木々・草花を鑑賞することができます。



芙美子の使った旅行かばん、芙美子の書いた書などが展示されています。



芙美子自画像 第二詩集「面影」の巻頭を飾りました。1932年頃（新宿歴史博物館蔵）



アトリエ（現在は展示室）画家であった夫・緑敏のためにつくられました。年・4回、林芙美子資料の展示替えがあります。部屋は道路から離れているためとても静かです。



書斎として造られましたが、後に夫と息子の居室兼寝室となりました。優美なつくりです。左手には7尺の床の間があります（下の写真左）。



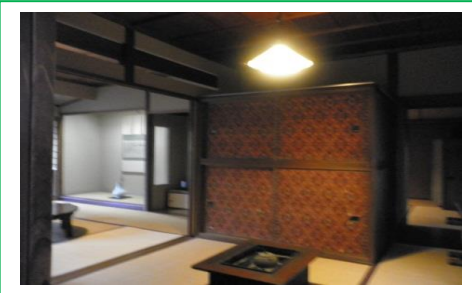
その他の展示物



芙美子の使っていた物



展示室では、VTR が流れています。これは亡くなる4日前の映像です。



次の間：親子三人の朝食の部屋。寝室となった隣室のため更紗の張られた置き押入れが造られました。左手奥は7尺の床の間がある寝室。



森光子主演、舞台「放浪記」のポスターです。舞台は2009年5月29日の2017回目の公演が最後となりました（森は2012年11月10日に逝去）。



芙美子の年表



石蔵ギャラリー。夫の緑敏が芙美子の遺品を管理するために建てた石蔵です。現在は、ギャラリーとして写真などが展示されています。

私は十年前に現在の場所に家を建てた。私の生涯で家を建てるなどとは考へてもみなかったのだけれども、八年程住みなれていた借家を、どうしても引越さなければならなくなり、私はひまにまかせて、借家をみつけて歩いた。まづ、下町の谷中あたりに住みたいと思ひ、このあたりを物色してまはつたが、思はしい家もなく、考へてみると、住みなれた、現在の下落合は、去りがたい気がして、このあたりに敷地でもあれば小さい家を建てるのもいゝなど考へ始めた。幸ひ、現在の場所を、古屋芳雄さんのおばあさまの紹介で、三百坪の地所を求める事が出来たが、家を建てる金をつくる事がむづかしく、家を追いたてられていながら、ぐづぐづに一年はすぎてしまったが、その間に、私は、まづ、家を建てるに於いての参考書を二百冊近く求めて、およその見当をつけるやうになり、材木や、瓦や、大工に就いての知識を得た。

大工は一等のひとを選びたいと思つた。

まづ、私は自分の家の設計図をつくり、**建築家の山口文象氏**に敷地のエレヴェションを見て貰つて、一年あまり、設計図に就いてはねるだけねつて貰つた。東西南北風の吹き抜ける家と云ふのが私の家に対する最も重要な信念であつた。客間には金をかけない事と、茶の間と風呂と厠と台所には、十二分に金をかける事と云ふのが、私の考へであつた。

それにしても、家を建てる金が始めから用意されていたのではないので、かなり、あぶない橋を渡るやうなものだつたが、生涯を住む家となれば、何よりも、愛らしい美しい家を造りたいと思つた。まづ、参考書によつて得た智識で、私はいゝ大工を探しあてたいと思ひ、紹介される大工の作品を何ヶ月か私は見てまはつた。

(新宿歴史博物館蔵)

◆芙美子はスター建築家 山口文象に設計を依頼しました(昭和一四・一九三九年秋)。竣工は昭和一六・一九四一年八月)。芙美子は亡くなる昭和二六・一九五一年六月までの一〇年間で、夫の緑敏や養子の泰とともにその家で暮らしました。文象に設計を依頼後、芙美子は執筆の傍ら建築の勉強を熱心に行い、二〇〇冊近くの参考書を読みました。文象の事務所の腕利き所員と棟梁を同行して京都に赴き、大徳寺、町家、民家などを見学してまわりました。

◆建築家の山口文象やまぐちぶんぞう(一九〇二年五月一日浅草生れ。一九七八年五月一九日没。祖父は宮大工、父は今の清水建設の大工棟梁。父の仕事を継ごうと当時の清水組に入社し、工場や銀行の工事現場に配属されました。建築家に憧れ、一九二〇年に退社し、逋信省宮繕課の製図工になりました。竹中工務店などを経て、一九三〇年一二月、渡欧しました。目的は、黒部川第二発電所関係のダムに関する「技術調査」でした。当時ベルリンにいた建築家グロピウスの事務所働き、ダム関係の調査を行いました。

一九三二年に帰国後、事務所を開設し、設計した大学付属病院が最先端のモダニズム建築として注目を浴び、一九三八年、黒部発電所の作品を発表し、建築家として確固たる地位を築きました。

文象は近代建築の輝かしい旗手として、作品や論文をさかんに発表しました。しかし、モダニストのイメージが崩れるのを恐れて、和風建築の芙美子邸は雑誌等には一切発表しませんでした。流行作家である施主・名声を博した建築家・腕利き大工の三者のコラボである芙美子邸について残された資料は、右に紹介した『家をつくるにあたって』の一文だけです。ただし、大工棟梁の息子として和風建築に造詣が深かった文象は、鎌倉浄智寺・関口邸茶席、画家・前田青邨邸など木造の本格的和風住宅にも秀作があります。